

関わり合いながら、自ら学びに向かう児童の育成 ～『学びたい』『伝えたい』を生む新聞の活用を通して（1年次）～

長岡市立下川西小学校

1 学校の概要

下川西小学校（羽鳥益実校長、児童数 58 名）は、長岡を代表するお米と里芋の生産地である下川西地域の中央に位置している。田んぼが広がる豊かな自然の中で、地域と学校が一体となって小規模校の良さを生かした教育活動を行っている。

学校運営協議会の地域の方の発案で、令和 5 年度から学校ボランティア『and さつき』が組織化され、多くの地域の方から、年 60 回以上も児童たちの支援をしていただいている。田植えや稲刈りはもちろん、畑での植え付けや収穫、絵本の読み聞かせから、初めて習ったり道具を使ったりする「初めてシリーズ」として 3 年生の習字、4 年生の彫刻刀、5 年生の裁縫まで、その支援は多岐にわたっている。

児童は、明るく素直で、異学年同士での関わりが多いため、全校が一家の家族のような温かさがある。上記の写真は、朝日小学生新聞掲載の「ハコフグぼうしを新聞でつくろう」をペア学年で一人一つずつ制作した時のものである。上学年が下学年に作り方を優しく教え、新聞を通して全校での絆がより深まった。学習にも前向きで、関わり合いながら自分の学びを深めようと努めている。

このように、地域全体の支援の厚さ、児童同士の繋がりや強さが本校の特色である。



2 NIE実践のねらい

NIE の指定を受けて 1 年次の研究・実践となる。本校の実態として、課題に対して活発に意見交流がされているようにも見えるが、一部の児童たちによる話し合いになっている場面も少なくない。また、課題把握や解決も自分事となっておらず、話についていけないまま 1 時間を終えてしまう児童もいる。原因の一つとして、各学級 10 人前後の固定化された人間関係の中で、自分の意見を表出することの良さや価値に気付いていないことが挙げられる。また、意見を伝えたくても、意見をもてずにいたり、伝え方が分からずにいたりする児童もいるように感じる。新聞の活用を通して、正しい文章表現力、児童の知的好奇心を高め、児童自らが課題を見付け、解決に向かう姿をねらいとした。

また、本校は特色を生かした「ふるさと学習」に力を入れている。「ふるさと学習」とは、下川西地域に関する内容を地域と密着して行う、生活科や総合的な学習の時間のことである。そこに、今年度は新聞の活用も絡めることで、地域の実態との比較や発信材料にも繋がると考えた。下川西に関する事象を学習する活動を通して、気付く力・追究する力・表現する力・見つめる力を育み、郷土への愛着を一層深めてもらいたい。

3 本年度実践の概要

(1) 校内研修

NIE 研究の 1 年目、新潟日報社の木村様からのご講義をはじめ、以下のような研修を行った。

| 期日 | 内容 | 研修概要 |
|------|--------------------------------|---|
| 4/28 | 研修計画全体会 | NIE に関わって 1 年間の研修計画を職員全体で共通理解を図った。 |
| 5/8 | 全校朝会 | 全校児童に NIE の概要や目的、取組について説明をした。 |
| 7/11 | 職員研修 (新潟日报社 木村様) | 新聞の構成や児童たちへの新聞の読ませ方などを教えていただいた。 |
| 7/18 | N タイ参観&ご指導 (NIE アドバイザー 坂井様) | 各学級の N タイの様子を参観後、より良い N タイの取組についてご指導をいただいた。 |
| 7/28 | NIE 授業について (NIE アドバイザー 坂井様) | NIE の授業実践例を紹介していただいた後、一人一実践の単元構想を行った。 |

(2) NIE コーナー

5 月中旬から、1 階職員室前廊下に新聞を自由に閲覧できる「NIE コーナー」を設置した。また、その壁面を新聞に関する掲示板として、定期的に更新していった。

【掲示板の活用例】

- ・おすすめ記事紹介
- ・記事に関するクイズ
- ・授業で作成した〇〇新聞の掲示



(3) NIE タイム (N タイ)

5 月中旬から、毎週木曜日、昼休み後のモジュールの時間を「NIE タイム (N タイ)」として、各学級で新聞に触れる活動を行った。最初は、言葉探しやクロスワードなどの新聞遊びを通して、児童たちに新聞に親しませることを目的とした活動が中心だったが、次第に記事の 5W1H 探しや要旨まとめ、記事を読んでから意見を交流するなど、学級の実態に合わせて、内容を段階的にレベルアップさせていった。

また、毎週の N タイの内容の記録やデータ保存をして、他学級の取組を自学級でも取り組みやすいように整備した。

【活動例】

| 低学年 | 中学年 | 高学年 |
|--|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・言葉探し ・写真相像クイズ ・記事紹介 | <ul style="list-style-type: none"> ・クロスワード ・見出しの穴埋め ・記事読み&感想共有 | <ul style="list-style-type: none"> ・記事の読み比べ ・要旨まとめ ・記事読み&意見交流 |

(4) 授業実践

一学級一実践、新聞を活用した授業実践を行った。

| 期日 | 学年 | 教科・単元名 | 授業概要 |
|-------|-----|---|--|
| 9/12 | 5年 | 総合 「長岡有数の米どころ！下川西の米作りの秘密を探れ！」 | 猛暑×少雨による米への影響を記事から調査・共有し、下川西の米の現状と比較した。 |
| 10/10 | 4年 | 総合 「防災を学ぼう」 | 防災新聞作成のための、新聞構成の工夫をペアで見付け、共有し、レイアウトを考えた。 |
| 10/16 | 学習室 | 自立 「ポップコーン屋さんを開こう！」 | 記事掲載の販売の様子を参考に、ポップコーン屋さんのより良い販売について試行した。 |
| 10/30 | 1年 | 国語 「しらせたいな、見せたいな」 | 記事にある写真の効果を知り、自分が伝えたい内容に合うサツマイモ掘りの写真を選んだ。 |
| 10/31 | 2年 | 国語 「どうぶつ園のじゅうい」 | “時間”に着目させる記事を扱い、文章の短冊カードの正しい順番を探究し、議論した。 |
| 11/7 | 3年 | 総合 「下川西の野菜を調べよう・広めよう～ふる“さといも”を伝えよう～」 | 里芋の魅力が伝わるパンフレットを目指し、見出しや文章構成を友達同士で推敲した。 |
| | 6年 | 総合 「下川西の福祉について私たちにできること～日常の暮らしをハッピーに、未来をピースに～」 | 地域の高齢者が喜ぶ企画を記事や高齢者の声から考え、高齢者に提案し、意見を練り上げた。 |



4 実践例

(1) 3年 総合的な学習の時間

「下川西の野菜を調べよう・広めよう ～ふる“さといも”を伝えよう～」

授業者：教諭 福井 環貴

① ねらい

作成したパンフレットの見出しや文章構成について、良いところや改善点を伝え合う活動を通して、より良い書き方や伝え方に気付き、より相手に伝わりやすいパンフ

レットに高めることができる。

② 使用した新聞記事

「地元の良さを伝える新聞づくり」朝日新聞 2023年9月23日

「シマウシで虫よけ」毎日子ども新聞 2025年9月25日

③ 本時の手立て

ア 関わり合いを生むための場の設定

これまでの学習で作成したパンフレットを読み合い、自分たちが新聞から見つけた見出しや文章構成のポイントができていないかや、里芋の魅力が伝えることができているかなどを確認し合う活動を設定する。読み合う前に、自身のパンフレットの中で意識したポイントや、一番伝えたいことを確認することで、自信をもって関わり合い、良い点や改善点について伝え合うことができるようにする。相互に関わり合いながら、相手のパンフレットの良さやポイントに気付くことで、自らのパンフレットの完成度をより高めていく姿を期待する。

イ ねらいを達成するための新聞の活用

児童が率先してポイントを活用できるよう、児童の言葉からポイントを生み出した。その重要性を全体で共有しながら読み合いや伝え合いをすることで、繰り返し「ポイントを使う」という場を設定する。本時では、作成したパンフレットについて、「一番伝えたいこと」「どんなポイントを使ったのか」という点に注目して読み合い、感想や意見を伝え合う。児童同士の関わり合いを通して、相手のパンフレットの工夫や伝えたいことに気付きながら、自分が受けたアドバイスから、相手により伝わりやすいパンフレットにすることを試みる。

④ 授業の実際

ア 関わり合いを生むための場の設定

本時では、それぞれが作成したパンフレットについて、互いに読み合い、魅力が伝わるのかを確認した。これまでの学習の中で、新聞から分かりやすい文章を書くためのポイントを見付け、全体で共有し、それらを活用することでパンフレットを作成してきた。また本時では、パンフレットのコピーを見せ合い、読みながら線を引いたり、アドバイスを書いたりできるようにすることで、児童は、これまで学んできた新聞のポイントが活用できているかや、見出しの工夫ができていないかについて、相互に意見し合う姿が見られた。その後の学習でも、友達からもらったアドバイスを確認しながら、パンフレットを修正する様子が多く見られた。



イ ねらいを達成するための新聞の活用

本時のねらいを達成するために、新聞から「より伝わりやすい文章を書くためのポイント」を見付け、オリジナルの名前を付けた。それらを掲示することで、児童はパンフレットを作成する際に、常にポイントを意識しながら作成することができた。



⑤ 授業後から単元のゴールまでの姿

本時で伝え合ったアドバイスをもとに、11月20日の里芋のPR体験に向けてパンフレットの修正を行った。当日は、「なじら〜て」を訪れた多くの方にパンフレットを渡すことができた。また、パンフレットを読んだ方からのアンケートでは「下川西地域の里芋の魅力が伝わったか」「パンフレットは読みやすく、伝えたい内容がよく分かったか」という項目で非常に高い評価を得たことで、児童は作成の過程も含めて達成感を感じることができた。

(2) 6年 総合的な学習の時間

「下川西の福祉について私たちにできること

～ふだんのくらしをハッピーに未来をピースに～ 授業者：教諭 小越 悠介

① ねらい

ミニ敬老会の内容や呼びかけ方法をアドバイザーの方に提案し、対話することを通して、お年寄りが笑顔で参加できる活動について考えを深めることができる。

② 使用した新聞記事

「ボッチャ楽しみ孤立防ぐ」新潟日報 2025年1月25日

「ジャズの魅力 若い世代に」読売新聞 2025年10月16日

「楽しく踊り認知症予防」新潟日報 2025年10月16日

「住民がスマホ教室 シニアと交流の場」読売新聞 2025年10月21日

③ 本時の手立て

ア 関わり合いを生むための提案内容の工夫

児童たちは前時に、ミニ敬老会について提案したいことをまとめている。その提案は、a 新聞記事、b 下川西コミュニティセンターに聞いた質問の回答内容、c 児童の知識や経験の3つを根拠にしてまとめている。根拠を上記3つの中から述べることで、児童の思いだけに偏らない説得力ある提案になるからである。また、質問したいことを事前に複数用意させることで、アドバイザー（地域の高齢者）の方の肯定の感想だけで終わるのではなく、多様な意見をいただくことで、活動内容や呼びかけ方法について考えを深めていく。

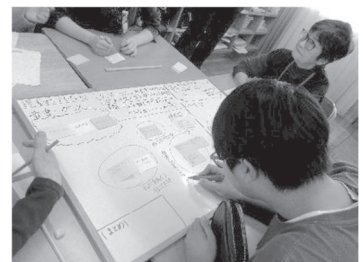
イ 自分事として課題を捉えるための新聞記事の活用

ミニ敬老会の活動内容について考えるにあたって、各グループは、様々な地域の高齢者との関わりに関する新聞記事を参考に、提案するアイデアを考えた。本時では、自分たちが考えたアイデアをアドバイザーの方に説明する際、その根拠として新聞を活用し、より良いものに練り上げていく。

④ 授業の実際

ア 関わり合いを生むための提案内容の工夫

本時では、自分たちが考えた「ミニ敬老会」についてアドバイザーの方に提案した。ダンス提案グループでは、アドバイザーの方との問答を繰り返し、実際にダンスを一緒に楽しむ中で、意見をいただくことができた。また、



デジタル体験グループでは、児童からの質問でアドバイザーの方の困り感を中心に引き出すことができ、児童の認識とのズレを体感することができた。どのグループも真剣かつ楽しい様子で取り組めたため、アドバイザーの方の肯定的な感想だけで終わるのではなく、アドバイザーの方から多様な意見をいただき、活動内容や呼びかけ方法について考えを深めることができた。

イ 自分事として課題を捉えるための新聞記事の活用

自分たちが考えたアイデアをアドバイザーの方に説明する際、新聞記事や、アンケートの結果をもとに提案をした。児童たちは指示棒を用いて実際の記事を説明し、アドバイザーの方々も傾きながら聞く様子が見られた。自分たちの思いだけでなく、世間や地域の声を参考に意見を伝えたことがアドバイザーの方の納得感に繋がった。



⑤ 授業後から単元のゴールまでの姿

本時でのアドバイスをもとに、ミニ敬老会の活動内容を改善した。アドバイスを共有し、全員で改善点を考えた。12月17日の敬老会当日は、アドバイザーの方の声を参考にしたアイデアを生き生きと発表する姿が見られた。お年寄りの方から、「自分に合った強度の運動で楽しめた。」「スマートフォンの使い方が分かってよかった。」等の意見をいただいた。本単元を通して児童たちは、地域の福祉課題解決のためにできることを自分事として考え、これからも地域貢献・発信に努めていこうとする気持ちが見られた。

5 成果

7月の児童アンケートで、「新聞による新たな気付きがありましたか」という項目で、86%の児童が肯定的評価をした。12月にも同アンケートで87%と同等の結果だった。1年間を通して、児童にとって新聞がより身近なものになり、学ぶ手段として活用できる子が増えたことが分かる。これは、全学年でNIEタイムや授業実践を行った成果だと考える。

下学年の児童の実際の様子からは、身に付けさせたい力を決めた継続した取組により、児童が安心して楽しく活動に取り組むことができ、児童も教師も実感を伴った学びに繋がった。上学年では、ニュースへの関心が高まり、時事問題について児童同士で会話したり、新聞に書かれていることを根拠に読み書きしたりする場面も見られるようになった。また、「ふるさと学習」では、全学年が単元の中で生活科や総合的な学習の時間、他教科と合科的に組み合わせて新聞を活用した。地域との比較や発信材料だけでなく、魅力的な記事が児童たちの活動の目標になり、自分事として考えるきっかけになった実践もあり、ねらい以上の成果となった。

2年次に向けて、児童たちが記事の内容からより深く考えたり、記事から問いや答えを見付けたりする段階へのレベルアップをねらっていきたい。そのために、今年度の実践の成果と課題を職員で共通理解し、児童も職員も意欲を持続して取り組めるようにする。

(笹川 歩希)